

「教える」ことで「学び」、 「与える」ことで「与えられ」る交わり

当研究所は、その創設時から、常に大学の付属機関として社会貢献のあり方を考える歩みを辿っている。歴史書の中で確認することも難しいが、日本における大学セツルメント活動成立期においては本学もその一翼を担っていた。当時、目黒川のほとりにあった大崎地区等は「下層社会」を構成していたが、その地域に多くの明学生が入り込み支援にあたっていたことはあまり知られていない事実の一つとなっている。「地の塩」になることを希求するキリスト教主義大学だからこそ、このような事実を誇ることもなく、しかし、この大学に連なる人びとによってささやかであっても確実に受け継がれてきたことは、まさに明治学院大学らしさそのものでもある。

このセツルメント活動が、大学（生）と地域社会を連結することに貢献し、しかも、時代を超えて学問・研究の成果について、それを最も必要とする人びとに直接「届ける」役割の意義を明らかにしたことは、本学の卒業生であり、教員であり、理事長であった阿部志郎先生の論考から読み取ることができる⁽¹⁾。セツルメント活動は、その歩みの中で社会調査を重視していたことが読み取れ、社会調査を実施し地域社会の実態を把握する現実認識の重要性を強調するものであったという。本『年報』のバックナンバーを見ると、当研究所が、このようなミッションを脈々と受け継いできたことが分かる。本号もそのような歴史と意義を受け継ぐことができたことは幸いである。

人や社会への向き合いに主たる関心を置く研究領野ではエビデンス・ベースト・プラクティス（＝科学的証拠に基づく実践）への志向に多くのエネルギーが注がれている。社会福祉においても同様である。しかし、社会福祉の場合、このような実践が、ソーシャルワーカーの考え方によるもの、あたかも合理的雰囲気醸し出すような理由（言葉）を付与しつつ、実際の支援過程では当事者の存在を片隅に追いやり、置き去りにして、再び「ワーカー中心主義（worker centered）」「活動（成果）主義（activity centered）」「ワーカーによる操作主義」「ワーカーによる温情主義」の現出へ繋がる「罨」に陥る可能性を内包する課題に目を向けるべきかも知れない。大学が養成した人材としての社会福祉専門職による当事者に向けられた事件性を伴う不祥事が後を絶たないからである。

それは胸痛める事故ばかりであるが、かかる現実を通して、社会福祉研究は何かを当事者から学び取る意識を持つことがセツルメント活動に見出せる理念の継承に繋がるかもしれない。セツルメント活動には「教える」ことで「学び」、「与える」ことで「与えられ」る交わりを希求する視座が底流にあったことを想起できればである。ここでは、ソーシャルワーカーとして専門的な知識や技術だけに関心を寄せるのではなく、当事者が持つ知識にも関心を向けつつ支援過程に取り込み、当事者の困難を跳ね返す「力（resiliency）」に着目する支援的態度を身につけるべき重要性が喚起されることになる。そのことにより、当事者の尊厳を重視しつつ、実は、当事者の生きる世界にもソーシャルワーカーとしての認識を遙かに超えた「現実」の存在に気づけた自分と向き合える状況を生み出すことになるからである。それは、当事者にとって一体何が「現実」であり、それをソーシャ

研究所年報 41 号 2011年 3 月 (明治学院大学社会学部附属研究所)

ルワーカーがいかなる価値観 (ワーカー個人の私的な「意味世界」) に依拠して認識しているかを把握できること、つまり自己認識の程度が問われることを意味する。

私たちは、実践する者、調査する者、科学する者に垣間見る当事者を置き去りにする「不遜な態度」を超克する手がかりをセツルメント運動のミッションから読み取ってみたい。

2010年12月

社会学部附属研究所所長 北川 清一

【注】

(1) 阿部志郎「セツルメント運動の社会思想史的考察 (I)」『明治学院論叢』第36号第1集、1955年。